

## 「理想」とは何か（納富）

【平成24年度倫理学専攻講演会講演要旨】

# 「理想」とは何か

—プラトンと近代日本—<sup>(1)</sup>

納富信留

「理想」という日本語は、現在日常で広く用いられ、私たちの生活で肯定的・否定的におおきな役割を担っている。しかし、この言葉が元来明治期に造られた哲学概念であることは、あまり知られていない。本論文では、この語の哲学概念としての成り立ちと普及の状況に立ち返り、背景にあるプラトン哲学との関係を吟味することで、「理想」という理念が現代社会においてもつ可能性を示したい。

## 1、西周による哲学用語「理想」

「理想」という語は、明治以前には日本でも中国でも存在していなかった。この語は、明治初めに西周によって造語されたことが知られている。

森岡健二が調査し、『哲学・思想翻訳語事典』でも紹介されているように、西周は、明治10（1877）年に J.S.ミル（John Stuart Mill, 約翰・士低瓦的・弥留）の『功利主義論』（*Utilitarianism*）の翻訳『利学』で、“idea”を「観念」、「ideal」を「理想上ノ」と訳している<sup>(2)</sup>。それら2つの訳語が西のオリジナルであって、それ以前に日本や中国で訳語として用いられていなかったことは、明治初期の事典から確認される。具体的には、明治2（1869）年刊の『ロブシャイド英華字典』にも、明治6（1873）年刊の柴田昌吉・子安峻『英和字彙』にもこれらの訳語は見られない。幕末明治の翻訳事情は複雑で、英語から中国語訳を経て日本に入って来た場合もあるという。それらのどこにも確認されないことは、西の訳語が先行する日中の事典類に依拠していないことを示す。

「理想」という訳語が『利学』で最初に用いられたという説は、森岡の研究以来知られているが、実際には「観念、理想」の2語は、それに先立って明治6（1873）年に執筆された『生性発蘊』でも用いられている。『生性発蘊』は、西が西洋哲学の歴史を簡潔にまとめた手稿である。そこでは、プラトン

## 「理想」とは何か（納富）

哲学が次のように説明されている。

其弟子伯拉多（プラト）ハ、観念（アイヂエ）即チ理ヲ以テ模型トナシ、物質（メツトル）ヲ以テ鎔鉄トナシテ、論ジタル<sup>(3)</sup>

ここで「観念即チ理」と訳した「イデア」を、注において次のように補足説明している。

観念ノ字ハ仏語ニ出ツ、今此書ニハ英ノイデア、仏ノイデーナル語ヲ訳ス、共ニ希臘ノイデイン見ルノ義ヨリ来レリ、即チ物像ノ想中ニ存スル者ヲ指シ、又広く理想ノ心ニ現スルオモ指ス、伯拉多ノ学派ニテハ理ノ字ノ如ク広く見タリ<sup>(4)</sup>

私が確認したかぎり、これが「理想」という日本語が初めて用いられた箇所である。重要なのは、この語が「観念」という訳語と共に使われ始めた点、及び、当初プラトン哲学に関わるものであった点である。西はプラトン派が「理」を基本とすることをつよく意識しつつ、「理想」という語を造ったのである。他方で、西が「理想」という語を「観念」への注の補足説明で用いている状況は、これがここで初めて造語されたものではなく、すでに理解可能な単語として存在していたことを示すように見える。西やその仲間たちは、明治6年以前に、すでにこの新語を使い始めていたものと推定される。

プラトンの「イデア論」は、哲学の礎としてながく西洋文明で受け継がれ、“idea”（イデア、アイデア、イデー）という概念は、歴史の屈折を経ながら西洋哲学の基本概念となっていた。西以来、この哲学用語は「観念、理念、理想」といった漢語で訳され、日本でも哲学の基本概念となった。そのうち「観念」は、明治以前にもすでに仏教用語として普及していたが、「理想」は西周による純然たる造語であった。“philosophia”（フィロソフィア）に当てた「（希）哲学」という用語のように、西はしばしば、あえて朱子学や仏教で流通する既成語を避けて、意を汲んだ新たな漢語を造っている。「理想」はそのような一例である。

西の翻訳語の新しさは、同時代の辞典からも確認される。明治12（1879）

## 「理想」とは何か（納富）

年に出版された『英華和訳字典』では、“idea, ideal, idealism”の項に「理想」という訳語は見られず、この時点で中国語には存在しないことが判る<sup>(5)</sup>。他方、日本語では、明治15（1882）年刊の柴田昌吉・子安俊共著『英和字彙 第二版』、明治21（1888）年刊の島田豊纂訳『和訳英字彙』と棚橋一郎著『和訳字彙』がすべて「理想、観念」という訳語を採用している<sup>(6)</sup>。特に、『英和字彙』では、明治6（1873）年の初版で「意ノ、想像ノ」となっていた“ideal”の項に、9年後の第二版では「理想ノ」の訳語が、また“idea”の項に「観念」の訳語が付加されている。これは、明らかに西の訳語提案を受けての変更であろう<sup>(7)</sup>。西が提示した「観念、理想」という訳語、とりわけ新造語である後者は、すぐに辞典に採用されて急速に普及したことが判る。

哲学において、名詞“idea”とその形容詞“ideal”——名詞としても用いられる——は意味が異なるため、当初は前者を「観念」、後者を「理想」と訳し分ける提案がなされていた。例えば、明治14（1881）年に刊行された井上哲次郎編『哲学字彙』では“idea”が「観念」、「ideal」が「理想」と訳し分けられている<sup>(8)</sup>。しかし、3年後の明治17（1884）年に有賀長雄が増補した版では、“idea”が「観念・理想」、「ideal」が「理想的・観念的」と訳し直されている<sup>(9)</sup>。2者の厳密な区別は実際には難しく、哲学の現場では混同が多かったのである。実際、井上円了や清澤満之のように、「イデア」に「理想」という訳語を当てる場合が多く、“idealism”はそれに応じて「理想主義哲学」とも呼ばれていた。この成り行きは、西周が「イデア」を説明した際の「観念、理想」の訳語の二重性から予想されていた。この二重性が「理想」という哲学概念のその後の受容におおきな意味をもっていく。

西周の最初の用例に見られるように、「理想」の語は、明治期に最初に西洋哲学を勉強し紹介した哲学者たち、とりわけ東京大学哲学科の初期の卒業生である井上哲次郎、井上円了、清澤満之、大西祝らが、まずプラトン「イデア」論との関係で用いていた。だが、その概念はすぐにプラトン哲学の範囲を越えて、より広く用いられていく。

例えば、明治16（1883）年刊の井上哲次郎『西洋哲学講義』巻3では、イデア界を「理想世界」と訳している。そこで井上は、プラトン哲学を「観念論」として紹介しながらも、倫理学については「理想世界ニ向テ上進ス、之ヲ最上ノ善トス」、「精神ヲシテ一旦忘レタル理想世界」と述べ、イデア界を「理

## 「理想」とは何か（納富）

想世界」と訳している<sup>(10)</sup>。また彼は、国家論を「理想的の論」と評している。

井上円了は、明治20（1887）年の「仏教活論序論」で西洋哲学を分類しているが、そこではバークレーに代表される「唯心論」と、「主観論・客観論」を統合したヘーゲルの「理想論」を区別している。

また、清澤満之は「西洋哲学史講義」でアイデアを「理想」、アイデア論を「理想論」と訳して、やはり国家論を「理想的」と記述していたが、明治21（1888）年に発表した『純正哲学』では、「理想論」を「実体論」との対比でこう説明している。

理想論ハ一種ノ理想即チ基範ニ順ジテ万物変現スト為スモノナリ。〔中略〕  
理想ハ各時ノ状態ニ於テ円ニ顕現スト雖ドモ理想ハ之ニ尺クルモノニア  
ラズ其過去ノ状態ヲ経過シタルモ未来ノ状態ヲ生起スルモ亦理想ノ功能  
ナリ<sup>(11)</sup>。

井上や清澤と共に東京大学で学んだ大西祝も、プラトン『ポリテイア』を「理想的国家の論」と評し、「彼れみづからは徹頭徹尾真面目にて此の理想的国家を説きしなり」と加えていた<sup>(12)</sup>。大西は自らの哲学の集大成である『良心起原論』（遺稿）において、この「理想」を中心とする新たな理論を展開している。「理想」は「観念」と区別され、あるべき目的として定立され、良心発生の基盤とされたのである<sup>(13)</sup>。

彼ら明治期の哲学者たちのプラトン理解は、西洋での評価や記述をそのまま受け入れたものであったが、プラトン哲学の観念論的傾向が「理想論」という名で普及した点は重要である。「理想」の哲学は、西洋哲学の中心潮流として紹介され、日本の哲学の新たな可能性として展開されていったのである。

その後「理想」という語は、“idea”の訳語から発展した新たな意味を担う哲学用語として定着する。明治29（1896）年刊の大和田建樹編『日本大辞典』（博文館）では、「理想」は「哲学上の詞。吾人が常に之を現実にせんと務むる予想的状態」と説明されている。大正11（1922）年刊の岩波書店『哲学辞典』は、「理想は善、目的、価値、規範、当為等の諸概念の表示せんとする当の物に就て最上根本的なるを意味す」と説明し、実現できない「空想」

## 「理想」とは何か（納富）

と区別する。そして、倫理上の問題として「理想は如何にして現実を動かし得るか」、「理想は現実し得るか否や」を挙げている<sup>(14)</sup>。

「理想主義」——「観念論」「唯心論」とも呼ばれた——は「唯物論」との対で日本近代哲学の柱となったが、前者はとりわけ官学アカデミズムでの権威的立場となっていた<sup>(15)</sup>。戦前に哲学の中心は、プラトンからカントに通じる「理想主義哲学」に求められた。他方で、「観念」という語は、主にデカルトやロック以来の近代哲学に適用され、現在ではプラトンを始めとする古代哲学にはほとんど用いられない。「観念」は実在性を欠く心の中の対象と看做されるが、「イデア」は主観を離れた超越的で真なる実在を指すためである。それゆえ、プラトン哲学の紹介では、カタカナで「イデア」と表記することが次第に定着していく。通常「観念」は「実在」と対比されるが、「理想」は「現実」と対にされるように、「観念／理想」では明らかに異なる概念布置がなされる。だが、「観念」と「理想」が明治から昭和前期にかけて互換可能に用いられた事情は、再検討されるべきであろう。また、これらの哲学概念の可能性は、プラトン「イデア」との関係で改めて問われるべき課題である。

西周の造語「理想」は、哲学から心理学や教育学、そして一般社会へと急激に広まり、「現実と対比される理念」という哲学概念から、「目指すべき、あるべき理想」という実践志向まで、幅をもって広く使われるようになった<sup>(16)</sup>。

## 2、近代日本社会における「理想」

明治30年代から爆発的に流通し、現在ではごくふつうの日常語となっているこの「理想」という語は、近代日本の「理想社会」の追求と関係していた。

「理想」は、「理想境、理想郷」としての「ユートピア」との関連で話題にのぼる。その初期の例として、明治15（1882）年に、久松定弘編『理想境事情』がある。これは「社会党、共産社会論」の歴史を辿る書物であるが、「ムールス氏「ユトピア」」（Thomas More, *Utopia*）の説明に続いて、プラトンにも言及がなされる。

理学社会と此説の行れたるは希臘（ 그리스 ）の碩学士「普拉多（プラト

## 「理想」とは何か（納富）

ン）氏」の著したる国家（スタート）論をもって嚆矢とすべし<sup>(17)</sup>

同書は巻末に「普拉多氏国家論大意並略伝」として、『ポリテイア』の梗概を付している<sup>(18)</sup>。

プラトンを「社会主義・共産主義」の起源として扱う歴史観は、当時の西洋諸国では一般的であった。その典拠は、『ポリテイア』（国家）篇で支配者層の私有財産が否定される理想的な国制論に求められた。明治初期にプラトン『ポリテイア』は、まずそのような文脈で日本に紹介されている。明治11-12（1878-79）年頃、急進的な反政府運動への対策として執筆された西周の論説「社会党論ノ説」や、小崎弘道が明治14（1881）年に発表した論考「近世社会党の原因を論ず」は、それぞれ異なる意図から、プラトンを「社会主義」の一派、その起源と看做している<sup>(19)</sup>。この伝統はその後も受け継がれ、明治36（1903）年の片山潜の著書『我社会主義』や、百瀬二郎が大正10（1921）年に発表した論文「プラトンの社会主義」等が、プラトンの「社会主義」思想をくり返し問題にしていた<sup>(20)</sup>。それは「ユートピア的（空想的）社会主義」であり、マルクス・エンゲルスの「科学的社会主義」によって乗り越えらるべきものと看做されていく。

「ユートピア」という名称の起源となったトマス・モアの著作『ユートピア』は、明治の早い時期から日本に紹介・翻訳されていた。井上勤による明治15（1882）年の翻訳は『良政府談』と題されており、翌年に再版される時には『新政府組織談』と改題された<sup>(21)</sup>。そこではまだ「ユートピア」に「理想」という語は当てられていなかったが、明治27（1894）年に出版された萩原民吉訳では『理想的国家』が書物の標題となっており、「ユートピア」は「理想島」と訳されている。訳者の萩原はこう解説する。

理想、素と多く架空の経緯に属す。然れども斯の「理想的国家」や巧麗なる想像の被覆の下、談切に熱心にして而して行ふ可きの暗示に充つ、即ち此れ学有て又た思慮ある英人の著にして時の社会上、政治上の弊害を攻撃せるもの<sup>(22)</sup>

トマス・モアのユートピア論は強くプラトンの『ポリテイア』に結びつけ

## 「理想」とは何か（納富）

られ、「理想社会」の提示として人々に受け入れられていた。

若し其れ其説の詳述に至ては故らに架空的なる斯の「理想的国家」は、是れプラトンの「共和国」を読み、而してまたブルタルクの描けるリカーガス治下のスパルタ人生活の記事を読んで、其想念を敏活ならしめたる学者の著たらざるば非ず<sup>(23)</sup>

より空想的で諷刺的なモアのユートピア論がプラトンに先立って翻訳され広く読まれていたことは、明治の近代化において「理想」国家を模索する政治と社会の理論にどれほどおおきな関心が寄せられていたかを示している。2人の「理想国」論は、しばしば空想的理想主義として並べて論じられたが、その中でも、プラトンにより現実世界への適用が期待されたのは当然である。「理想」という言葉は、「イデア」(idea)と「理想国」(ideal city, ideal state)の両方にまたがる意味で、プラトン哲学と深く結びついて用いられたのである。

「ユートピア」思想が近代日本で「理想」の語と手を携えておおきな影響をもった様子は興味深い。昭和4(1929)年に、カンパネッラ『太陽の都』、モア『ユートピア』、モリス『無何有郷通信記』<sup>(24)</sup>、ベーコン『ニュー・アトランティス』を収めた一巻が春秋社「世界大思想全集」で刊行されたが、その解説ではプラトン『ポリテイア』がしばしば言及されている。その月報で、英文学者の村山勇三がユートピア思想を解説して、トマス・モアとプラトンをこう比較している。

『国家』に比すれば、『ユートピア』は真剣味を欠いている。〔中略〕プレトンは誠実に此の主本理想を実現しようと努力して居るが、モアは実現不能を告白し、且つまた彼れがユートピアの長所として極力推賞したところの諸美德の大部分——例へば宗教的寛容等——を自ら実践しようとはしなかった。それは彼の実生活と死とが明白に示した所である。<sup>(25)</sup>

このように、モアのユートピア論が文学の鑑賞物であるのに対して、プラトンは現実政治への提言と受け取られていた。近代日本が目指した「理想」

## 「理想」とは何か（納富）

の国家は、ユートピア論と国家論の融合として、プラトン『ポリテイア』に具体的な指針を見出したのである。

プラトンの著作は、木村鷹太郎がベンジャミン・ジョウエットの英訳から重訳した富山房刊『プラトーン全集』（全5巻、明治36-44（1903-1911）年）で本格的に日本に導入された。その第2巻で明治39（1906）年9月に出版されたプラトン『ポリテイア』の初訳には、『理想国』という独自の標題が付されていた。訳者の木村鷹太郎は「序論」の「プラトーン模倣者」という項目で、後のユートピア文学と「プラトーンの『理想国』に倣ひて、自己の理想を發表したる者」を比較して紹介している。それらは、キケロ『共和国』、アウグスティヌス『神の国』、ダンテ『王国』、トマス・モア『ウトピア』、ベーコン『新アトランチス』、カンパネッラ『日の都』であった<sup>(26)</sup>。このような扱いにおいて、この著作が「ユートピア＝理想国」思想の系譜に位置づけられていた。

あくまで空想的な小説であるトマス・モアの『ユートピア』と比べると、プラトン『ポリテイア』はより哲学的であり、現実的な理想国家（ユートピア）論として読まれ得る。それゆえ、現実政治や社会への批判・揶揄だけでなく、社会改革を目指す設計主義的な理想論として社会のおおきな関心を集めていったのである<sup>(27)</sup>。

日露戦争中に翻訳されたプラトン『理想国』は、訳者の木村によって明治国家の建設、および、そのための徳育への理想像を提供するものと信じられていた。「高く理想を唱ふるプラトーンの高遠なる理想主義」<sup>(28)</sup>を語る『理想国』は、明治以来の日本国家の近代化に方向づけを与えるものとされた。木村は長大な「解題」を「理想の価値」という一節で結んでいる。

実に理想が人間の思想言行に感化を及ぼすは非常なるものにして、素より直ちに之れを実行するを得ずと雖、理想中より流れ出づる所の徳義は、能く人間を高揚せしめ、以つて社会或は商業以上のものとなし、国家を高めて商業上の利害及び自衛の必要以上のものとなす。理想は實に人類進歩の永久の前駆なり、向上の援引者なり。理想の価値夫れここに在りと謂ふべし。<sup>(29)</sup>



## 「理想」とは何か（納富）

木村にとってプラトンは「高潔なる理想」の人であり、第1巻「序」冒頭以来、「高遠な理想」を欠く日本社会にそれを導入し鼓舞する必要性とそのため翻訳の意義を高らかに謳っていた。「理想」をキーワードとする木村のプラトン理解において、『理想国』はまさにその中心を成す書であった。

若い頃からプラトンに心酔した法学者の上杉慎吉は、より具体的に、天皇を中心とする立憲政体をプラトン「理想国」の近世的実現と看做していた<sup>(30)</sup>。また、北一輝、津久井龍雄、大川周明、鹿子木員信と連なる国家主義思想家が『ポリテイア』に熱狂したのは、その著書の厳しい現実批判と改革的社会設計の理念に共感し、日本国家が目指すべき「理想国」をそこに探ったからである<sup>(31)</sup>。彼らは純粹に「正義」と「善」を実現する理想と希望を抱いて、『ポリテイア』を読んだのである。プラトン『ポリテイア』は、こうして日本の近代国家建設の「理想」を導いた。

「理想」という流行語は、明治後期から大正、昭和前期にかけて実際に社会を動かす標語となった。田中正造による足尾鉍毒事件への運動を応援するために明治34（1901）年に結成された社会改良団体「理想団」には、内村鑑三、幸徳秋水、木下尚江、堺利彦らが参加して積極的な活動をくり広げた。その社会改革の「理想」は、一方でキリスト教の理念、他方で社会主義に向かっていく。

大正デモクラシー下ではプラトン『ポリテイア』の「哲人政治」論がブームとなり、理想的な政治が論じられる。また、白樺派の文学・社会変革運動が盛んになり、武者小路実篤は「理想主義」の標語のもとに「新しい村」の建設に向かう。そこには、トルストイと共に、プラトンやユートピア思想の流行が背後にあったと推測されている<sup>(32)</sup>。

他方で、「理想」はこの時代のアジア主義とも関係している。明治36（1903）年に岡倉覚三（天心）が英文で発表した最初の著書『東洋の理想』（*The Ideals of the East*）は、日本芸術の歴史に「理想」を見ている。「アジアは一つ」で始まるこの理想には、大川周明、鹿子木員信といった「大アジア主義」の信奉者が連なるが、彼らはプラトン『ポリテイア』の理想国論に拠り所を求めた点で共通している。

「ユートピア」や「理想郷、理想国」というテーマは、大正から昭和にかけてもはやされる一方で、哲学から理論的な分析が加えられることは少な

## 「理想」とは何か（納富）

かった。その中で特筆すべきは、三木清が昭和16（1941）年5月に『知性』という雑誌で発表した「ユートピア論」である。三木は、太平洋戦争を目の前にした日本で人々が掲げる「新秩序」が一体何を意味するかを、「ユートピア、神話、理想」といった概念との関係で論じている<sup>(33)</sup>。「昭和研究会」という政策集団で指導的な役割を果たしていた三木は、昭和13年に近衛文麿内閣が発表したアジア政策の標語「東亜新秩序」を、「ユートピア」論として理論的に擁護しようとしたのである。

「ユートピア」がそのように時事的な問題になる状況下で、プラトンの「ユートピア = 理想国」論にも、魅力と共に危険性が認識されるようになる。林達夫は昭和14（1939）年に論文「ユートピア——プラトンの場合——」を発表し、「空想改革家」プラトンの思想、とりわけその「貴族主義」を批判した<sup>(34)</sup>。プラトンの理想国論が、ナチズムと同様に日本の全体国家主義に用いられていた戦前の状況で、南原繁や和辻哲郎が厳しく対決した『ポリテイア』の「理想国」の問題性を、林は「ユートピア」論自体の問題として捉え、批判したのである。

第二次世界大戦の敗戦以降、「理想」が唱えられることは稀になった。おそらくこの傾向と相即して、プラトン著作についても『理想国』という標題はまったく使われなくなり、『国家』の標題が普及する。戦後「理想」は空疎な理念としてタブー視される。現代では、「それは理想論に過ぎない」とか「今は理想主義に浸っている場合ではない」というように、「理想」という語が肯定的に使われることはほとんどない、とも言われる。近代日本社会が抱いた「理想」が挫折し崩壊した後、「理想」という理念そのものが拒絶され、忘却されたのであろう。

### 3、「理想」（ideal）という概念

「理想」という訳語が当てられた英語“ideal”は、「イデア的」という意味のラテン語の形容詞“idealis”に由来するが、古典ギリシア語では対応する語がない。また、ラテン語でも古典期には用いられておらず、最初期の用例は、後5世紀に活躍した著述家マルティアヌス・カペッラ（Martianus Capella）にあるとされる。“idealis”は、遅く生まれたラテン語であり、プラトン哲学

## 「理想」とは何か（納富）

の背景の下で用いられたようである。

中世哲学では、トマス・アクィナス（Thomas Aquinas, 1225-1274）、ボナヴェントゥーラ（Bonaventura, 1221-1274）、ドゥンス・スコトゥス（Duns Scotus, 1265頃-1308）らが、英語圏でもケンブリッジ・プラトニストのヘンリー・モア（Henry More, 1614-1487）らが用いている。「イデア的」という形容詞が基本の意味であったが、「理想」を意味する名詞としても、やがて広く使われるようになる。

“ideal”は“idea”と語源を等しくするが、文脈によっては異なった意味を担う語である。つまり、「イデア、観念」の形容詞形としては「イデア的、観念的」という哲学概念であり、それがより一般的な用いられ方をする場合には「理想的、理想」という意味となるのである。この点、明治期から日本語では「イデア・観念」と「理想」という別語に訳し分ける提案が為されてきたことは、明瞭な区別がない西洋諸語との比較で興味深い。例えば、カントは『純粹理性批判』のなかで“Idee”と“Ideal”を別の文脈で論じているが、日本語訳では「理念」と「理想」として明瞭に訳し分けられている。その両方でカントはプラトンの「イデア」に言及しつつ議論を展開していた<sup>(35)</sup>。西周は、プラトン哲学の基本である「理」の語を盛り込んで「理想」という造語を提案し、理性に基づく理念「ロゴス」（λόγος）を強調した。それは、背景をなすこのような西洋哲学の伝統に適った訳語であった。

「理想」の理念を明らかにするためには、それと関連する諸概念と、意味内容がどう重なり、どう異なるかを検討することが必要であろう。

### 1) 「希望、望み」

「希望」は「理想」ときわめて近い言葉であるが、その内実はかなり異なるように思われる。「希望」は理由がなくても、具体性がなくても、漠然とでも抱くことができる心の中の光のようなものであろう。それは説明できない力であり、いわば心の向きである。それは強力な力であり、「理想」を支える基盤になり得る。他方で「理想」は、理性によって説明され、納得されるものである。それはより冷静に、私たちの生を導く道を示してくれる。

## 「理想」とは何か（納富）

### 2) 「期待」

「期待」という言葉も、「希望」や「理想」と並んでよく使われる。だが、「期待」は具体的な到達目標を指すものであり、実現可能な期待が満たされることが求められる。他方で「理想」とは、実際の到達を越える理念として設定される目標であり、その都度なされる「期待」を越えるところにある。

### 3) 「夢、夢想」

「理想」はまた、「夢」とも異なる。「夢」は、文字通りには睡眠中に無意識に抱く雑多な表象やストーリーを指す。比喩的には、覚醒時に漠然と抱く表象のこと、あるいは意図的に非現実性に逃亡して描く表象を意味することもある。そのような「夢」は、根拠なく抱くことができるものである。だが、「理想」は確かな理由と方向づけとを必要とし、実践への計画をなんらか含意する。熱情と冷静さ、理性と情念のバランスが、「理想」という概念に込められている。また、「夢」は「現実」とつよく対比され、そこから切り離されることで成立する。そこには想像の自由がある。他方で、「理想」は現実化という方向から切り離せず、けっして現実化しない「夢」とは異なる。

### 4) 「憧れ」

「憧れ」には、なにかを目指すという動きが込められている。その点では、後に触れる「アイデア」の志向性と通じる契機である。だが、憧れの向かう先は架空なものであっても構わない。それは、「夢、空想」とも共通する非現実的な含意をしばしば有する。また、「憧れ」には、対象との距離を意識的に保つ感覚も生きている。他方で「理想」は、目標の合理的な明示を含んでおり、たんなる「憧れ」以上のものである。

### 5) 「空想、ファンタジー」

「空想」は「夢想」ほどではないが、非現実性を意識しながら自由に想像する可能性で担保される。それは現実を相対化することで、私たちの精神を束縛から解放してくれる積極性をもつ。他方で、「空想」する者はその内容に責任をもつ必要はない。それは空想が実践に結びつかず、その連関の欠如を特徴とするからである。この点で「空想」は、実践性を特徴とする「理想」と異なる。

## 「理想」とは何か（納富）

### 6) 「ユートピア」

「理想」は理性的な思考として、それを実現するための方策を生み出していく。実際のあり方に関与しない「理想」はなく、それを実践するための計画を理性的に導けない理想は、空虚な夢物語に過ぎない。この点で、文学に登場する「ユートピア」は、「理想」と異なる。「ユートピア」は非実在や不可能性を舞台設定として積極的に用いながら、想像力によって自由なイメージを展開するものである。だが、「理想」はその実現可能性を信じながら、それに向けた理性の実践を伴う。

### 8) 「青写真」

「理想」は、たんなる「青写真」(blueprint)でもない。「青写真」とは、建物や都市の設計図や、実施マニュアルのように、実現にむけたすべてのプロセスと具体的な方途を示すものである。それに対して「理想」は、「あるべき姿」という価値、および、実現への動力(エロース)を中心とするものであり、個々の具体的施策を含む必要はなく、むしろ多くの場合、含まないことで成立するからである。

このように、「理想」という語は、私たちの生活において用いられる関連諸語との差異において、独自の意味を担っている。その特徴の源は、原語“ideal”に含まれるプラトン「アイデア」との関係にあるはずである。

## 4、プラトン「アイデア」論との関係で

プラトンは「理想」にあたる表現を用いていないが、『ポリテイア』が言論において追求した「ポリテイア」には「理想」の意味が込められていた。

「美しきポリス」(καλλίπολις)と呼ばれる「理想ポリス」(ideal state)は、アイデアそのものではなく、「アイデア的なもの」、つまり「言論において」描かれたあるべきポリスの姿である。それはアイデアを語り出す試みであるが、言論で描かれたかぎりでは一つの具体的なモデルに過ぎない。この事情を詳しく見ておこう。

『ポリテイア』第5巻で理想のポリスの実現可能性が問われた時、「モデル」、つまり模範例(パラダイグマ、παράδειγμα)についてこう説明される。

## 「理想」とは何か（納富）

モデルのために、私たちは、正義それ自体がどのようなものであるか、また、完全に正しい人間が、もしいたとして、どのような人でありうるかを探求してきたのだ。不正と、もっとも不正な人間についても同様である。  
(472C)

そのモデルに目を向けることで、正と不正、幸福と不幸の関係を調べるのが哲学探求の目標である。この試みは、画家がもっとも美しい人間のモデルを描く営みに喩えられる。言葉によって制作されたポリテイアはそのようなモデルであり、実際に存在しているという保証は、すぐに必要はない。

モデルとなるポリス（理想のポリテイア）はこの地上に存在している感覚の対象ではないが、かといって不変で完全な真実在でもない。それは、言論によって具体化され可視化されたモデルと看做される。実際、プラトンは「正しさ」「美しさ」「善さ」のアイデアを明瞭に認めているのに対して、「ポリテイア」や「ポリス」のアイデアを語ってはいない。その違いは決定的である。理想のポリテイアは、それ自体がアイデアなのではなく、「アイデア的」なもの、具体的には「正しさ」というアイデアの表現なのである。ここでは、「アイデア」とはどのようなものか、それが「言葉」（ロゴス）で表されるとはどのような事態か、考えておこう。

「アイデア」とは、恒常的・不変的、絶対的・完全・自体的な実在である。それに向かう「エロース（恋）」と「想起」は、欠如にある私たちにとって、完全性への強い憧れである。アイデアに出会いそれを観照することで、人生が価値、幸福や不死性を得る（『饗宴』210E-212A）。この世界において不足や欠如にある感覚の経験から、アイデアの知識へ想起がなされる（『パイドン』74A-75B）。そこで肯定的な価値として「善、正義、美」のアイデアを希求し、その実現が目指される（『ポリテイア』500B-501C）。

アイデアそのものは、不変で永遠の実在として、言論によってあれこれと描かれる類いのものではない。プラトンは「アイデアを観る」という表現を用いるが、それは、私たちの魂の目、つまり「知性」をそれに向けるあり方を意味する。しかし、アイデアはけっして神秘的な直観、つまり一人の内奥での接近のみを許す対象ではない。アイデアをめぐるのは、それら相互の関係を観て

## 「理想」とは何か（納富）

取るために、人と人とが言論（ロゴス）を交わしていく対話（ディアロゴス）が求められ、それが「対話の術」（ディアレクティケー）として哲学の内実をなすとされるからである。その対話が生み出して吟味に付す言論（ロゴス）が「理想」である。

つまり「理想」とは「イデア」を言葉（ロゴス）で表現したものであり、絶対者として希求される具体的で個別的な対象、つまり「モデル」である。真に「ある」イデアに対して、イデア的な理想は「あるべき」対象であり、両者は存在と行為に対応する。プラトン中期哲学は「範型（パラダイグマ）イデア」を提起したとしばしば語られる。しかし、実際にはイデアは超越的な実在であり、感覚物と見比べられるモデルではない。「イデア」と「パラダイグマ」との重なりと相違は、プラトン中期哲学に魅力と、やがて『パルメニデス』第1部で取り上げられる理論的困難（「第三人間論」等）を与えたのである。

では、なぜ「イデア」に加えて「イデア的なもの」、つまり「理想」が必要なのか。それは、私たちがイデアに関わり、それを見ながら現実を形づくっていく実践において、モデルとなるものが必要だからであろう。プラトンが言論で提示する「理想国」は、「正しさ」のイデアを志向しながら、あるいはそれを垣間見ながら言葉で描かれたモデル（パラダイグマ）であった。その「理想」のポリテイアが、私たちが生きる世界で正しい社会や人生を実現する目標、原型、そして原動力となるのである。

私たち人間はイデアを容易に直視できない。イデアをすでに見知っていて、それをそのままこの世界に実現できるのであれば、言論による哲学の探求も、モデルを描く作業も必要はなかったであろう。だが、私たち人間は、何が本当にあるのかをめぐって、あるべき姿を議論し、それぞれの論拠を検討しながら共に探りながら生きる必要がある。絶対であるイデアをめぐって、それぞれが「あるべき」と信じる「理想」のあり方を「理想像」として示すことで、それに向かって言論を共に構築し、それを見ながら実際のあり方を形づくろうとするのである。

各人が提示する理想像は、ある点において不十分であったり、間違っていたりするかもしれない。むしろ、理想像が一つのモデルであり、唯一で絶対のイデアではない以上、不完全であるのは当然である。だが、そのどこに欠

## 「理想」とは何か（納富）

損があるかは、言論による吟味を通じてしか明らかにされない。絶えざる吟味と自覚によって理想像は修正され、あるいは廃棄されて、よりよい理想像が打ち立てられていく。この言論の動きを導くのが、「あるべき」イデア志向としての理想、即ち「イデア的なもの」なのである。

対話によって理想を理性的に検討する者は、そのかぎりで理想の構築に参加する者である。議論することで立てられた一つの理想は、それを語る人々の間で共有され、それをもとに共により善く生きていく基盤となる。プラトンの『ポリテΙΑ』では、ソクラテスと共にグラウコンやアデイマントス、そして他の者たちもこの「理想国」を語り聞くことで、その理念に協力し、共にその理想を生きていく。

議論の途中や一部に違和感を感じたり不都合を見出したりした場合には、疑問を提示して納得のいくまで言論で説明を求めると、修正を要求できる。実際グラウコンとアデイマントスは、ソクラテスの「理想国」論に再三、疑問や問題をぶつけていた。そのような言論の共同作業なしに、理想を生きたことはなく、一つの理想が簡単に合意されることはなく、通常は枠組みの違いや利害や思わくによって合意形成は難しい。にもかかわらず、「善い、正しい」といったイデアを目指す哲学の共通基盤において、そしてそれに向けて真摯に語り聞いていく態度において、理想の追求は可能となる。理想を語る哲学は、辛抱よく冷静になされるべき、最高度に理性的な人間の営みなのである。

「理想」には、よいものとわるいものがある。その基準となるのが「イデア」のはずである。一つの理想が実際に人々に共有されていても、それが誤った考えに基づいていたり、それをモデルにした実践がよくない結果をもたらしたりする場合は、歴史の事実が示している。そうした時に、理想像は吟味に付される。「理想」は、それに向けて全体が動員されるような「閉じられた」ものであるべきではなく、言論によって「開かれた」ものとなるべきである。そのかわり、批判や反対によって理想をめぐる言論を交わした人々は、その責任において自分たちの理想に関わっていかなければならない。言論によって理想を戦わせること自体が、すでに理想に向けて進む私たちの理性的な生き方だからである。



## 5、現代の「理想」論

私の論では、「アイデア」があるがゆえに「イデア的なもの＝理想」が成立する。だが、現代は、プラトンのイデアを否定する時代である。「理想」だけあれば「アイデア」などという超越的実在など不要ではないか、そう考える人は多いはずである。プラトンの形而上学には、古代ではアリストテレス以来、現代では19世紀末のニーチェ以来、厳しい批判が加えられてきた。しかしながら、私は、「理想」が真に哲学的な意義を果すためには、絶対的存在としての「イデア」という地平がなんらか必須であると考えている。イデア論という枠組みを取り去った「理想」は、根拠を欠く思い込みになってしまうのではないかと危惧されるからである。

私たちは実際、人生や社会においてさまざまな「理想」を抱いて生きている。だが、それらばらばらな「理想像」が結局は個人の趣味や思いの問題に過ぎず、どれでも構わないということになると、「理想」は相対主義に陥る。個人的な満足や便宜的な目標に過ぎないものであれば、それを社会で共有したり、まして強要したりすることは不必要である以上に、悪になってしまう。理想像が実際に多種多様であっても、それをそのままで良しとして各々が勝手に追求していく時に、一つの共同体は生まれない。

だが、それ以上に危険なことに、なんらか絶対的な規準を欠いた「理想」は、力の一方的な行使やそれらの衝突という事態を招きかねない。自分の思う理想をそれで良しとして、より善いものへの議論や他者との対話を受け入れないとしたら、多数の理想は対立の軸になってしまうからである。相対主義を退け、「理想」を語る中でより善いあり方を言論で吟味し、さらに、共同で社会と人生の理想を構築できるとしたら、その前提には、おそらく「イデア」といったなんらか絶対的な方向を共同で見据える姿勢と努力が必要なのである。

求められる「理想」とは、一部の特権者が知ることによって他の人々を支配するといった宗教的真理ではなく、また、イデオロギーとして対立の牙城となる理念でもない。不知を自覚するすべての人間たちがそれを目指して対話と探求を続けるためには、哲学の共通基盤としてなんらかの絶対的真理が要請される。イデア論という枠組みを取り去った「理想」は、合理的根拠を欠く思

## 「理想」とは何か（納富）

い込み（ドクサ）に過ぎず、個々人、社会ごとに勝手な「理想」が唱えられる状況（相対主義）では、理性的探求の保証が失われる。そこでは、「理想」追求が閉ざされた営みになり、暴力、盲信、対立を結果する危険がある。「理想」が実際にはドクサやイデオロギーに過ぎないのならば、私たちは思いこみの世界から抜け出せないのである。

「理想」は、なんらか絶対的なあり方（アイデア）を共同で求める哲学の営みを現実化し、その目標を一つの目に見える形、つまり「言論」のモデルで提示する。提示したモデルを議論し検討しながら、私たちはそれに憧れて実現しようと実践する。「理想」は共有されるという前提で議論されることで、はじめて現実において力をもつ。それゆえ、言論による厳しい吟味や批判に晒され、学問的な探求の対象にもなるのである。よりよい「理想」は、協同で追求されることで、人間の理性的な生き方を可能にする。これが現代に求められている。

「理想」の基底をなす「アイデア性」は、生の時間や現状の制約を越え、「永遠の相の下に」世界や生き方を見ることを可能にする。他方で、プラトン「理想」論には、保守的な本質主義、安易な現実否定の危険性、排除的傾向といった問題点も指摘されている。現代においてプラトン哲学的な「理想」を活かすためには、そういった問題点を乗り越える「理想」論の構築が求められる。

- (1) 本原稿は、2012年6月30日に行われた国士舘大学哲学会講演会での報告に基づく。講演会でご質問いただいた方々に感謝したい。その報告は、翌月に出版された『プラトン 理想国の現在』（慶應義塾大学出版会）第七章、第十章の論点をまとめたものであったが、本稿では部分的にその後で発展させた論点を盛り込んでいる。
- (2) 森岡（1991）、106-118頁、石塚・柴田編（2003）、50-51頁（山口誠一執筆）参照。
- (3) 西（1960）、30頁。ソクラテスの説明に続くため、「其弟子」で始まっている。
- (4) 西（1960）、31頁。
- (5) 津田・柳沢・大井（1879）参照。ちなみに、“Idea”には「意、意思、意見、念頭、心思、想、想像」が、“Ideal”には「卓実的、意中的、心中的；空幻的、幻想的」といった訳語が収められている。

## 「理想」とは何か（納富）

- (6) 森岡（1991）、117頁「第二八表」参照。
- (7) 森岡（1991）、141、143頁参照。
- (8) 関連語彙も参照：“Ideal World”（理想境）、“Idealism”（唯心論）、“Ideation”（観念力）、“Ideology”（観念学）；井上（1881）、41頁。
- (9) 井上・有賀（1884）、54頁。二版の異同については、佐藤（2007）、842-843頁参照。
- (10) 井上（1883）、巻3、第68節、36頁。
- (11) 清沢（2003）、49頁参照。
- (12) 大西（1903）、195、230-235頁参照。
- (13) 大西（1904）、堀（2009）参照。この著作における「理想」理念については、納富（2012）、192-194頁で論じた。
- (14) 宮本他（1922）、945-946頁参照。
- (15) 日本の「観念論」の歴史については、船山（1956）を参照。
- (16) 惣郷・飛田（1986）、591-592頁参照。
- (17) 久松（1882）、19頁。
- (18) 久松（1882）、62-64頁参照。
- (19) 納富（2012）、92-94頁参照。
- (20) 納富（2012）、116-118頁参照。
- (21) 井上（1882）、（1883）。
- (22) 荻原（1894）、緒言1頁。
- (23) 荻原（1894）、2頁。
- (24) トマス・モアと合わせて紹介されることもあったウィリアム・モリス（William Morris）の『ユートピア便り』（*News from Nowhere*, 1890）も、早い時期から翻訳され流布していた。社会主義者の堺利彦が明治36（1903）年に『平民新聞』で『理想郷』の標題で抄訳を連載し、明治37（1904）年に単行本で出版した。
- (25) 村山（1929）、3頁。
- (26) 木村（1906）、190-195頁、（1924）、第3巻、190-195頁。
- (27) 田制（1928）、田中（1930）参照。
- (28) 木村改訂版第1巻（1924）、序文5頁。
- (29) 木村（1906）、195-196頁、（1924）、第3巻、195頁。傍点強調は改訂版にのみ付されている。

## 「理想」とは何か（納富）

<sup>(30)</sup> 上杉（1916）、610-614頁。納富（2012）、101-103、121頁参照。

<sup>(31)</sup> 納富（2012）、103-105、131-138頁参照。

<sup>(32)</sup> 納富（2012）、186-189頁参照。

<sup>(33)</sup> 三木（1967）。納富（2012）、181-182、255-259頁参照。

<sup>(34)</sup> 林（1939）。

<sup>(35)</sup> カントとの関係については、納富（2012）、241-245参照。

### 【参考文献】

- 石塚正英・柴田隆行監修『哲学・思想翻訳語事典』、論創社、2003年  
井上哲次郎『西洋哲学講義』、阪上半七（全6巻の和装本）、明治16(1883)年  
井上哲次郎編『哲学字彙』、東京・東京大學三學部、明治14(1881)年  
井上哲次郎編、有賀長雄増補『哲学字彙』、東京・東洋館、明治17(1884)年  
井上勤訳『トーマス・モール 良政府談』、東京・思誠堂、明治15(1882)年  
井上勤訳『トーマス・モール 新政府組織談』、東京・思誠堂、明治16(1883)年  
上杉慎吉『議会议政及政府』、有斐閣、大正5(1916)年  
大西祝『大西博士全集 第3巻 西洋哲学史・上』、警醒社、明治36(1903)年  
大西祝『大西博士全集 第5巻 良心起原論』、警醒社、明治37(1904)年  
荻原民吉訳『トーマス・モーア 理想的国家』（社会文庫第3編）、博文館、  
明治27(1894)年  
木村鷹太郎編『プラトーン全集』全5巻（巻1のみ松本亦太郎と共訳）、  
富山房（明治39(1906)年9月発行の巻2のみ、真善美協会）、明治36-44  
（1903-1911）年  
木村鷹太郎編『プラトーン全集』第7版、全11巻、富山房、大正13-14(1924-25)年  
清沢満之『清沢満之全集』第4巻、岩波書店、2003年  
佐藤亨『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』、明治書院、2007年  
惣郷正明・飛田良文編『明治のことば辞典』、東京堂出版、1986年  
田制佐重「ユトピア社会思想家の教育観」、『教育論叢』12-6、昭和3(1928)年  
田中宜太郎『プラトーン理想国』、玉川学園出版部、昭和5(1930)年  
津田仙・柳沢信大・大井鎌吉訳『英華和訳字典』、吉田橘翁、明治12(1879)年  
西周『西周全集』第1巻、大久保利謙編、宗高書房、1960年  
納富信留『プラトーン 理想国の現在』、慶應義塾大学出版会、2012年

「理想」とは何か（納富）

- 林達夫「ユートピア—プラトンの場合—」、『思想』205、昭和14(1939)年  
久松定弘編纂『理想境事情 一名 社会党沿革』、東京・進学舎、明治15(1882)年  
船山信一『日本の観念論者』、英宝社、1956年  
堀孝彦『大西祝「良心起原論」を読む—忘れられた倫理学者の復権—』、  
学術出版会、2009年  
三木清「ユートピア論」、『三木清全集』第14巻、岩波書店、1967年；初出、  
『知性』河出書房、第4巻第5号、昭和16(1941)年5月  
宮本和吉他編『哲学辞典』、岩波書店、大正11(1922)年  
村山勇三「ユートピア作家としてのモアとモリス」、『思想春秋』19（春秋社、  
「大思想エンサイクロペディア第一期思想全集月報」）、昭和4(1929)年  
森岡健二『改訂・近代語の成立 語彙編』、明治書院、1991年  
キリアム・モリス『理想郷』、堺利彦抄訳、平民社、明治37(1904)年